

J.S.バッハの鍵盤作品

協奏曲 ニ短調

バッハの鍵盤作品 BWV974 として知られる本曲だが、原曲はヴィヴァルディと同時代のイタリアの作曲家アレッシンドロ・マルチェッロのオーボエ協奏曲(1716 年出版)。バッハの編曲はワイマール時代(1708-17)に行なわれたと推定されている。3 楽章からなるが、特に中間楽章はモダンで、1970 年のイタリア映画『ベニスの変』で使われて有名になった。

パルティータ 第 1 番

バッハは 1726 年からパルティータを個別に出版していき、1731 年に全 6 曲をまとめて出版した。第 1 番冒頭の短い「プレリュード」は、3 声へと発展する。それに続くのは、イタリア風の陽気な「アルマンド」。さらに、3 連符のリズムで突っ走るイタリア式の「クーラント」、旋律の豊かな装飾性が際立つ「サラバンド」と来て、軽やかな 2 声の「メヌエット I」と、ミュゼット風に凝った 4 声の「メヌエット II」が交錯する。終楽章の「ジーグ」はイタリア式で、D.スカルラッティの特技だった、腕の交差テクニックをはじめて披露した楽曲。

イタリア協奏曲

本曲は、1735 年に出版された《クラヴィーア練習曲集 第 2 部》に収められており、バッハのクラヴィーア曲のなかでも特に親しまれている。3 楽章構成(急／緩／急)という、典型的なイタリアの独奏協奏曲の楽章配置となっている。

フランス組曲 第 5 番

《フランス組曲》は 1720～22 年頃、ケーテン時代の作。明朗な雰囲気満ちた第 5 番は全 7 楽章からなり、《フランス組曲》のなかでも最も演奏頻度が高い。冒頭を飾るのは、溢れんばかりの歌が魅力の「アルマンド」。そのあと、力強く疾走する「コレンテ」、優美な「サラバンド」、非常に短いがよく知られた「ガヴョット」、軽快な「ブーレ」、古拙の味わいが光る「ルール」が続き、歓喜が爆発する「ジーグ」で曲を閉じる。

幻想曲とフーガ

ライプツィヒ時代の 1725 年頃に書かれたとされる。美しい旋律が際立つ古風な幻想曲(ファンタジア)に、対照的な 2 つの主題が組み合わせられた 4 声の二重フーガが続く。小曲ながら力強い作品で、バッハの隠れた名作として愛されている。

J.S.バッハ(ブゾーニ編)：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番 より シャコンヌ

「シャコンヌ」は、J.S.バッハ《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番》の終楽章(第5楽章)に置かれている。バッハの無伴奏作品のなかでも屈指の名曲であり、単独で取り上げられる機会も多い。イタリア出身で、ドイツを中心に多方面で活動したフェルッチョ・ブゾーニは、バッハの楽譜校訂者としても知られ、本曲を含めバッハ作品の編曲を多数手がけている。